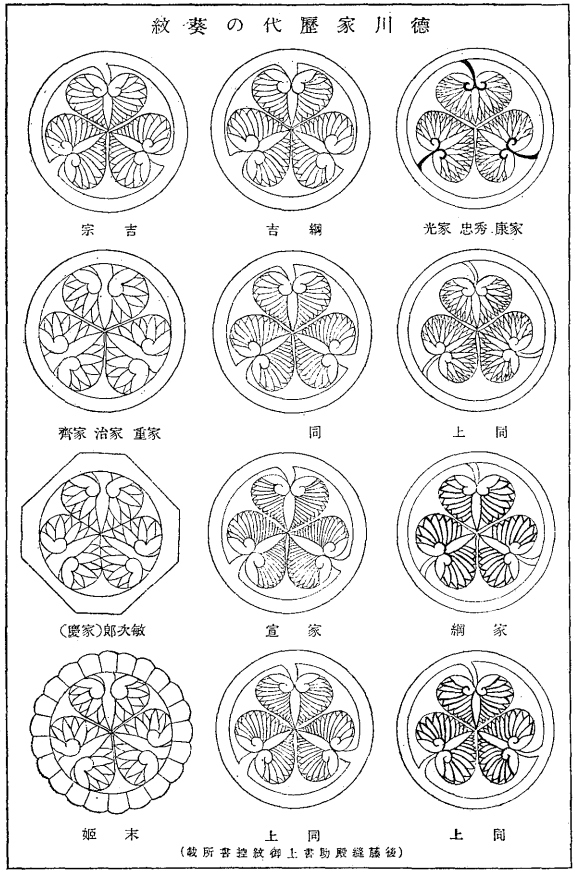
○「南葵」とは本字當て字の組合セ

牧野富太郎

紀州デアッタ徳川家デ能ク用キテ居ル「南葵」ノ字面ハ元來南ノ本字ト葵ノ當テ字トノ組合セデ出來タモノデアルカラ實言ヘバ餘リ好イ熟字デハナイ、南葵文庫ナドト云フト如何ニモ上品デ且高尚ニ聞ユルガ其レヲ解剖シテ見レバ丁度剝製ノ鳥ノ樣デ上ハ邊ハ奇麗ダガ中身ハツマラヌ鵺（ヌエ）的ノモノデアル

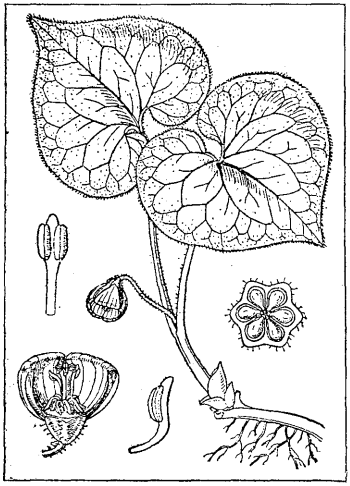
徳川家ノ紋ハあふひデアルガ是レハ元來山城加茂神社ノ祭ニ用ウルかもあふひ一名ふたばあふひ即チ謂ユル雙葉細辛カラ來タモノデ其葉形ニ基ヅキテ其レヲ紋ニ作ッタモノデアル、此かもあふひハ元來細辛ノ類デ其學名ヲバ Asarum



（小縮）ル據ニ『學章紋本日』著君輔頼田沼

caulescens Maxim. ト稱シうまのすずくさ科ニ屬シ本來ノあふひ即チ葵トハ固ヨリ何等ノ關係モ有タナイモノデアル、其レユエ南葵ト書クノハ決シテ好イ字面トハ謂ハレナイ

然レバあふひ即チ葵トハ何デアルカト云フト其レハふゆあふひノ事デ支那デ葵ト云ヒ學名ヲ Malva verticillata L. ト稱シあふひ科ニ屬スル一種ノ植物デアル、直立セル多年草デ早ク冬時分カラ葉腋ニ聚ッテ花ガ咲キ其花體ハ小ク花瓣ハ淡紅色デ敢テ觀ルニ足ル程ナモノデハナイガ此葵ハ元來其苗、其根、其子（葵子或ハ冬葵子ト稱スル）ヲ藥用トシテ支那デ用キタモノデ『本草綱目』ナドニ載ッテ居ル、葵ハ撥デ此草ノ葉ガ日ニ向フテ傾キ其根ガ日ニ照ラサレルノヲ其レデ遮ッテ之レヲ掩ヒ保護シテ居ルカラ恰モ其葉ニ智ガアッテ之レヲ撥ッテ居ルモノト見立テ、其處デ其草ヲ葵ト名ケタモノダト支那ノ昔ノ學者ハサウ言ッテ居ル、又畔田翠山ノ著『古名錄』ニハ『諸經類考』ヲ引用シテ「天有十日葵與之終始故葵從癸」トモ書イテアル、葵ノ語原ニ就テハコンナ譯ガアルノデ我邦文學上デハ舊クひかげ草ノ名ガ稱ヘラレタ、



雙葉細辛　一名　ひふあもかも
ふたばあふひ
(Asarum caulescens Maxim.)
（日本植物圖鑑ノ圖）

葵ノ別稱トシテハ露葵、滑菜、滑葵、葵菜、奇菜、藤菜、阿郁、向日葵（ひまわりニモ向日葵（ト云フ同名ガアル））ノ數名ガアル、和名ハ之レヲふゆあふひト云ヒ又單ニあふひト稱スル即チ此あふひノ稱呼ガ昔カラノ本名デ『和名本草』（『本草類編』ニハ安於伊又ハ阿布比トアリ『倭名類聚鈔』ニハ阿布比トアル又『新撰字鏡』ニハ阿保比ト出テ居ル、ソシテ之レヲあふひト稱スルノハ『倭訓栞』ニ據レバ「あふひ　葵をいふ倭名抄にみゆ説文に葵傾葉向日といへり仰ぐ日の義なり」ト出テ居ル、大槻文彦博士ノ『言海』ニ「仰グ

日ノ略カ」ト書イテアルノハ此『倭訓栞』カラ採ッタモノデアラウト思フ、此あふひノ形狀ハ岩崎灌園ノ『本草圖譜』彩色圖並ニ飯沼慾齋ノ『草木圖說』墨繪ニ出テ居ルカラ其書ニ就テ見レバ解ルガ貝原益軒ノ『大和本草』ニハ「冬葵（アフヒ）　冬ミノル葉有ニ小岐ニ五ニワカル花甚小不レ足レ觀ニ者是也古ハ菜トシテ食ス內經ニ五菜ノ一トス後世ノ人不レ食レ之故ニ時珍綱目ニ移シテ入ニ濕草ニ」ト出テ居リ、マタ小野蘭山ノ『本草綱目啓蒙』ニハ「葵　カンアフヒ　冬アフヒ　凡單ニ葵ト稱スルハ皆コノ冬葵ノコトナリ古ハ食用トス五菜ノ一ナリ故ニ古文ニ菜ノコトヲ葵ト書タル例モアリト通雅ニ辯ズ此草ハ京師ニ自然生ナシ諸州江海濱ニ多ク生ズ近年城州山城ノ鄉ニ多ク栽子ヲ收テ四方ニ貨ス是冬葵子ナリ一タビ種レバ永ク絕ズ繁茂ス葉ハ錦葵（ゼニアフヒ）葉ニ似テ大サ三四寸圓ニシテ五凸ヲナシ尖ラズ細鋸齒アリ青莖直立ス高サ三五尺又紫莖ナル者アリ葉互生ス春月葉間ニ花ヲ開ク大サ三四分許五瓣ニシテ多ク攢簇ス色ハ白シテ微シク淡黃紫ヲ帶形錢葵花ノ如ニシテ至テ小

ふあんかひ　一名かんあふひ　葵
(Malva verticillata L.)
（本草圖譜ノ圖）

「南葵」とは本字當て字の組合せ

ナリ花後實ヲ結ブ又錢葵子ノ如ニシテ小シ花ハ春ヨリ冬ニ至マデ開謝相續ギ寒中ニモ花アリ冬葵ノ生葉ヲ採焙リ末トナシ食用トナシ乾苔ニ代ベシ一種葉邊ビラツキテ平カナラザルモノアリ最可ナリ故ニ其草ヲヲカノリト呼」ト出テ居ル、ソシテ李時珍ノ『本草綱目』ニハ「葵菜ハ古人種エテ常食ト爲シタレドモ今ハ種ウル者頗ル鮮ナシ紫莖ト白莖トノ二種アリ白莖ノモノヲ以テ勝レリト爲ス、大葉小花ニシテ花ハ紫黃色ナリ、其最小ナル者ヲ鴨脚葵ト名付ク其實大サ指頂ノ如ク皮薄クシテ扁實ナリ內子ハ輕虛ニシテ楡莢仁ノ如シ、四五月ニ種ウル者ハ子ヲ留ムベシ六七月ニ種ウル者ヲ秋葵ト爲ス八九月ニ種ウル者ヲ冬葵ト爲シ年ヲ經テ收メ採ル正月ニ復タ種ウル者ヲ春葵ト爲ス然レドモ宿根シ春ニ至テ亦タ生ズ』（漢文トアル）

あふひ即チ葵ハ前ニ述ベタ樣ニふゆあふひノ事デアッテ蜀葵ノたちあふひ、錦葵ノぜにあふひト緣ハ近イガ全ク別物デアル、然ルニ紋章學ノ大家沼田賴輔君ノ著ハサレタ『日本紋章學』（大年十五年三月發行）ニハ「古來、葵の字を用ゐるも、この文字は錦葵（ぜにあふひ）科に屬する錦葵（ぜにあふひ）、及、牻牛兒（げんのしやうこ）科に屬するテンヂクアフヒ等に用ゐられたるもの」トアルガ是レハ無遠慮ニ言ヘバチットマズイ、此場合錦葵ヲ出スハ葵ノ本物あふひ即チふゆあふひニ極近ク且舊イ姉妹ノ品種デアルカラ先ヅ大目ニ見ル事ガ出來ルトシテモてんぢくあふひヲ此ニ引合ニ出スノハ少シモ必要ノナイ許リデナク却テ此處ハ考證ト云フ事件デアル丈ニ其レニ對シテ當ニ之ヲ訂正スル要ガアル何トナレバ此てんぢくあふひハ德川末葉時代ニ外國カラ渡來シタアフリカ原產ノ植物デPelargonium屬ニ屬シ徒ニあふひノ名ヲ冒シタ緣遠キ者デ葵ト云フ者ノ本體ニ對シテハ全ク何ノ交涉モ有タナイ圈外者デアルカラデアル、此處ニ其考證ノ爲メニハ是非トモ無クテナラナイあふひノ本物ふゆあふひ即チ葵ヲ引合ヒニ出サネバナラナカッタ譯ダノニ沼田君ガ此本物ヲ逸シテ居ラレルノハ何事ニモ徹底的ニ研究セラレル注意深イ同君トシテハ蓋シ謂ハユル千慮ノ一失トデモ言フベキモノデ此權威アル大著ニ對シ且此著名ナ葵ノ紋ニ對シ誠ニ物足ラヌ思ガシテ殘念至極ナ次第デアル即チ此ニハ唯あふひ即チふゆあふひノ葵ノミサヘ出シテ置ケバ實ハ他ノモノハ何ンニモ入ラナカ

ッタ、植物ノ事ニモ通ジテ居ラレル沼田君ガドウシテマー其處ニ氣ガ附カレナカッタカガ不思議デアルかもあふひヲ紋ト成シ徳川氏ガ用キタ事ニ就キ前記ノ『日本紋章學』デ沼田君ノ述ベラレタ御説ニ據レバ「葵の家紋として始めて見えたるは、見聞諸家紋にありとす。同書葵紋を掲げて、丹波之西田と題せり、即ち西田氏の家紋としてこれを用ゐたりしを知るべし。戰國時代に至りて、三河の松平・本多・伊奈・島田の諸氏これを用ゐたり。徳川氏三河に入り松平氏を繼ぎ、亦この紋章を用ゐたり。後、將軍職に上るに及び、是よりこの紋章は權威を得て、殆ど菊桐の紋章を凌ぐに至りぬ。以上述べたる丹波の西田氏を始め、三河の松平・本多二氏が、如何にしてこの紋章を用ゐしかといふに、いづれも加茂神社の信仰に本づけるものとす。」、「松平氏を冒せる徳川氏は、其後本姓に復するに至りしも、尚、松平氏の家紋を用ゐ、遂に將軍職に上りしかば、こゝに於いて、從來葵紋を用ゐ來りし松平氏は、これを憚りて、葵、葡萄、鳩酸草等葵類似の紋章に改めたりしことは、謂はゆる廂を假して母屋を奪はれたるが如きものと云ふべし、是より葵紋は徳川氏獨占の紋章となり、一門親藩の外は、決してこれを用ゐるを許さず。」、「葵は加茂祭に用ゐられたる靈草なるが故に、この神を信仰せる人々が、この植物を神聖視し、紋章の行はるゝ時代に至りて、これに象りて家紋を定むるは、當然の歸結にして、猶天滿宮を信仰するものが、梅鉢の紋を用ゐ、諏方明神を信仰するものが梶葉の紋を用ゐるが如きものにして、謂はゆる信仰的意義に本づける紋章とす。」デアルノデ是ニ由テ之レヲ觀レバ此葵ノ紋ノ出來タ由來ガ能ク解カル

○何ンデモナイ片葉のあし

牧野富太郎

我邦諸處ニ片葉（かたは）の蘆（あし）ト呼ブモノガアッテ往々其土地ノ名物トナッテ居ル、多クノ人々ハ此かたはのあしヲ一種